

## 文学

## ラテンアメリカ文学の「民主化」

清水 憲 男

ラテンアメリカ文学ブームが一段落してきたのは、ラテンアメリカ文学にとって、むしろ好ましい現象だと私は考えている。今から約四半世紀ほど前、ラテンアメリカ文学が日本で盛んに話題になっていた頃、小説家の中村真一郎が某対談で次のような指摘をしている。文学史の視点から見た場合、いずれの文学運動であれ、「大体いいとこ二十年ぐらいしから続きませんからね、この南米の小説のブームも、もしかするとここらで一休みかもわかりませんね」。ブームの渦中にいるとき、人は「これこそ本物で本質的なもの」と、つつい息巻いてしまう。だが文学に相對する者は、文学の長い歴史そのものから謙虚に学ばねばならない。「二十年」の当否はともかく、文化現象は歴史事象として時間の中で生きてゆくものであることを、素直に認めなくてはならない。

30年ほど前、私は某誌に、ラテンアメリカ文学の紹介がまだまだこれからの日本にあって、翻訳・紹介者の批評的機能、道義性は極めて重大であることを指摘したが、生意気ということでさっそく上の先生に説教されてしまった。駆け出しのスペイン文学学徒でしかなく、ラテンアメリカ文学の素人は口を出すべきではない、というわけ

だ。その後事情があって、オクタビオ・パスの大きな著書を私が邦訳することになった。出版されて間もなく、ラテンアメリカ文学の大先達から目の敵にされた。ラテンアメリカ文学の専門家でもない私ごときが、大先生を差しおいて翻訳紹介をしたことが耐えられなかったようだ。

私にはきわめて原始的な視点があった。スペイン語圏の人なら専門家であろうがなかろうが、母国語としてオクタビオ・パスの作品を共有・享受している。だとするならば私がたまたまスペイン語を解することで、それを日本語に敢えて翻訳しても大罪にはなるまい・・・こういう甘い発想が日本の「プロの」ラテンアメリカ文学者からすると容赦ならないのかもしれないと考えた。新聞や雑誌で大家に名指して叩かれ続けた私は、それなりに傷つかないわけではなかった。そんな中で、当時まだ面識のなかった林屋永吉氏と詩人の飯島耕一氏の過分に好意的な訳評が出て、素直に多少救われたように思った。そしてなによりも感慨深かったのは、それから何年か経って、私をあれほど酷評された「プロの」ラテンアメリカ文学者から共訳のお誘いを受けた時だった。

しかし今は昔の単なる思い出となった個

人絡みのことなどより、はるかに大事な問題がある。それは日本におけるラテンアメリカ文学展開の「民主化」にかかわる。ここでの「民主化」の意味は、文学が普遍的、もしくは普遍的たろうとする営為であるなら、ラテンアメリカ文学作品を語る人が、当然ながら、いわゆるラテンアメリカ文学者に限定されてはならないということだ。ラテンアメリカ文学者以外でも、鋭いラテンアメリカ文学論を展開している方がおいであることを知らないわけではない。それでもなお、圧倒的な態勢が「カエサルものはカエサルに」（新約聖書・マタイ 22:17-21、マルコ 12:14-17、ルカ 20:22-25）に倣って、「ラテンアメリカ文学はラテンアメリカ文学者に」の感が相変わらず強いと思うのは、果たして私の偏見だろうか。

スペイン文学の最高峰『ドン・キホーテ』と日本との関係を考えてみると、日本で最初に本格的な『ドン・キホーテ』論を書いたのは、フランス帰りの中村光夫だった。近年では大江健三郎の『ドン・キホーテ』論が群を抜いており、学術的な体裁を整えたスペイン文学研究者たちの論よりも、はるかに読み応えがある。つまり出発点から今日にいたるまで、日本における『ドン・キホーテ』は、妙な言い方だが「スペイン文学者の拘束をちゃんと離れて自由な」歩みを進めてきたとも言えるのである。

他方、日本におけるラテンアメリカ文学の場合、その価値にいち早く注目したのはフランス文学者、英文学者たちであり、遅ればせながらラテンアメリカ文学の専門家台頭してきて、いわば失地回復を果たし

た。芸術の世界では、これに類する現象が少なくない。スペインの民衆的伝統詩ロマンセの価値を本格的に評価し始めたのはドイツ人、フランス人、イギリス人だったし、『ドン・キホーテ』に潜む悲劇性を指摘したのはスイス人、最初の本格的な校訂版を出したのはイギリス人だった。当のスペイン人はずっと後手に回っている。

もちろん最終的に重要なことは誰が先鞭をつけたかではなく、作品が結果的にそれなりにきちっと評価され、享受されることだ。そして幸いなことに日本でも、相当数の素晴らしい訳業がラテンアメリカ文学者によって達成されてきた。ところが多くの場合、翻訳者＝解説者＝研究者という日本の伝統的な図式の中で、おのおのの作品の特異性と共に普遍性が説かれながらも、ラテンアメリカ文学者以外によって、その普遍性が説かれたり、その作品について自由闊達な議論が展開されることはかなり例外で、出版界もそうした展開をさせるのに、さして関心がないようだ。その意味でラテンアメリカ文学のブームが落ち着いた今、あらためてそのブームの意義、紹介のされかたの当否、世界文学の中における位置づけなどが自由に討議され、評価される必要があるだろう。

さらなる反省が求められてもよいように思う。紹介が偏り過ぎていなかったか。ボルヘスなら、その高名のおかげで、すべてが名作であるかのような錯覚に基づいた商業主義の出版。ガルシア・マルケス然り。オクタビオ・パスが熱く語ったバロックのソール・フアナ・イネスが、あれほどラテ

ンアメリカ文化史全体の中で重要でありながら、そこに注目して紹介されたり論じられたりすることが、どれだけあったか。セルバンテスも賞賛したメキシコの古典詩人フランシスコ・デ・テラサスがどれだけ議論の俎上に載ったか。そもそもラテンアメリカ文学ブームの主人公たちは、20世紀になって突然そして偶発的に台頭してきた、などということが本当にありうるのだろうか。

古典ばかりではない。ペルーの大詩人セサル・バジェホやチリのゴンサロ・ロハスがしっかりと紹介されたことがあっただろうか。詩論者としてのバルガス・ジョサが紹介されただろうか。チリなどにおける旺盛な演劇活動の役割を、ラテンアメリカ文学者たちは、きっちり紹介してくれているだろうか。ラテンアメリカ思想全体を論じるのに限りない刺激を与えてくれるレオポルド・セアなどは、せっかく日本語で紹介されながらも、その思想が広範な議論展開の対象となったことを知らないのは、ただ単に私の認識不足によるものなのだろうか。ウルグアイのホセ・エンリケ・ロドーの存在が日本の知識人にどれだけ認識されているのだろうか。そのあたりの実情を知らないのは、ひとえに私の勉強もしくは情報不足によるものでしかないのだろうか。

日系詩人としてだけではなく、現代ラテンアメリカ詩壇全体でもきわめて重要な位置を占めるボリビアのペドロ・シモセや、ごく最近（本年4月27日）他界したペルーのホセ・ワタナベの「恩義」に、日本におけるラテンアメリカ文学は十分報いてきた

だろうか。答えは残念ながら「ノー」としか言いようがなさそうだ。日本語を知らないペドロ・シモセが、日本文学をラテンアメリカに紹介するのにどれほど寄与してくれたか、同じくホセ・ワタナベが日本文学の感性をどれだけラテンアメリカ文学界に伝えてくれたか。少々時間がかかっても、ぜひとも日本のラテンアメリカ文学者にやっていただきたい仕事だと考えている。他力本願めいたことばかり書いていると、呑気な傍観者とのレッテルを貼られてしまうかも知れないが。

文学を含め、おしなべて芸術は、研究されること以上に広く受け入れられ、享受されることをもって本義とされよう。一部の研究者の枠組みにとどまっている限り、芸術は十全たる機能を果たしたことにはならない。自戒の言葉でもあるのだが、芸術の研究者は象牙の塔に閉じこもりながらも、その対象を原作者同様、不特定の人に向けて解き放つのでなくてはならない。その意味でもラテンアメリカ文学はもっともっと「外から民主化」されねばならない。そしてそれが果たされたとき、文学は文字通り文学の虚構空間に限定されるものでなく、意外なかたちで現在ラテンアメリカ内外の社会、歴史、政治、経済、つまり人間の根本的な営為と絡み合い、絶妙なせめぎ合いを見せていることを、あらためて示唆するばかりか、そうした諸相を理解するための思わぬヒントを与えてくれるのではなかろうかと、スペイン文学研究の末席を汚すだけの私は、折にふれて偶想している。

（しみず・のりお 上智大学教授）